

300メートルの地下坑道に シルバーラッシュの夢を見る



間歩通り抜けのご案内

龍源寺間歩は正徳5年（1715年）の開発で、他に永久・大久保、新切、新横相間歩とともに代官所の直営で「五ヶ山」と呼ばれていました。

江戸時代（近世紀）の開掘の長さは600mに及んでおり、石見銀山では大久保間歩に次いでの大坑道です。良質の銀鉱石が多く掘り出されました。

この時代には間歩の坑口前に四ツ留役所が置かれていました。坑口に向って右側には役人の詰所があり、左側には鍵置場（鉱石を置く小屋）がありました。詰所には山方掛（係）3人、同心1人、山附などの役人が詰めていて、坑内作業の監督や夜は山方掛1人が宿直して見張り厳重でした。

山（間歩）を閉じたのは昭和18年（1943年）と言われ、実に228年間も間歩の開発が行なわれました。

昭和4年（1909年）4月14日には他の銀山遺跡13ヶ所とともに「石見銀山遺跡」として国指定史跡（文化財）に指定されました。

公開する坑道は江戸時代に開発された間歩156.7m（うち国指定史跡の範囲が坑口から20mまで）と栃畑谷へ通り抜けられる新坑道116.4mです。

江戸時代の坑道は高さ1.6m～2.1m位で、幅は0.9m～1.5mあり、ノミで掘った跡が当時のままの状態が全体に残っています。また、156.7mまでの坑道には鑢押し坑（鉱脈に沿って掘り進んだ穴）が左右の壁面から20数坑あり、坑口から85m地点には排水のための垂直に掘った豎坑（100m位）を見ることができます。

栃畑谷の新坑道は龍源寺坑道156.7m地点から左へ鍵状に上り斜坑で出られますが、坑道の右壁には「石見銀山絵巻」（県指定文化財・古文書）を電照板で展示しており、歩きながら当時の坑内の様子が楽しめます。栃畑谷は室町時代末から江戸時代初めに開発された屋敷跡や社寺、間歩などが散見され、石見銀山の歴史を見ることが出来ます。